

歌入道

歌
子
令
道

金子薰園著

昭和八年十月一日印刷
昭和八年十月五日發行

歌に入る道

定價金壹圓

著者 金子薰園

發行者 前田梅吉

印刷者 上西勳

不許複製

發行所

文進堂書店

大阪市南區橫堀七丁目一九

電話船場一九九九番
振替大阪一二四七二番

■ 歌に入る道目次 ■

◎ 歌は面白いものか.....	一
◎ 目の前の事實.....	九
◎ 凝視する力.....	一六
◎ 眼の明いてゐる歌明いてゐない歌.....	二六
◎ 調を破るといふこと.....	三五
◎ 不自然の中の自然.....	四三
◎ 歌を味ふ力.....	五三
◎ 感じの充實した歌.....	六二

◎ おつとりした作		七
◎ 驢馬の上の子供		七
◎ 誤れる思想		八
◎ 動く動かぬと云ふこと		九
◎ 自由に歌を詠み得られる端緒		九
◎ 歌の進歩すべき捷徑		一六
◎ 歌と文の材料の見分け方		二三
◎ 夾竹桃の咲く家から(一)		二六
◎ 夾竹桃の咲く家から(二)		二七
◎ 夾竹桃の咲く家から(三)		二七

◎ 自信と己惚と	一四三
◎ 批判する力(一)	一五二
◎ 批判する力(二)	一五九
◎ 他の批判を受くる注意	一六六
◎ 新年から受ける情緒	一六六
◎ 涼しきと云ふこと	一八三
◎ 純一な作の意義	一九〇
◎ 新しいと云ふこと	一九九
◎ 感情の迫つた時	二〇七
◎ 花の寫生	二四四

◎ 贈答の歌……………三五

◎ 女でなければ詠めぬ歌……………三三

◎ 日曜日の集ひ……………二五

歌に入る道

金子薫園 著

一 歌は面白いものか

『歌は面白いものか』

斯う云ふ意味の問を或人から受けた時私は言下に、『そりや面白い、初期の間は殊に面白い』と言つてやつたら、『それぢや一つやつて見ませうどうか教へて下さい』と云ふことで、それから其の人は歌をやり初めることになつた。

歌は面白いものか

『歌は面白いものか』

斯う云ふ問を發した人の心持ちは、どんなであつたらうか。私は今靜かに其の時の心持ちを考へてみる。其の人は、ただあつけらかんど、這麼問を出したんぢやあるまい。いかにも突如として居るが、此の問を出すまでには、何か動機がなければなるまい。どんな動機があつたんだらう。

其の人はこれまで歌のうの字も知らなかつたことは無からう。ちよつと位ゐ、古人の歌を口吟さんだこともあつたらうし、又今人の歌を誦んだこともあつたらう。然うして、何かしら興味を覺えたに違ひない。それから又友達か何か、歌の話をするのを、小首を傾けて聽いたこともあつたらう。そして、歌と云ふものは、何か面白きう

な氣がしたことがあつたらう。併し、それは甚だ稀薄なものであつたに違ひない。斯くして、若干の月日が経過した。或る日のこと、雑誌か何かに某氏の歌の話が出てゐたのを見、見ることもなしに見ると、歌はどの位、心の慰めになるか知れない、殊に繁劇な事務を執つてゐる人などには、其の境遇を境遇として親しみ安んずることが出来る。と云ふやうなことが書いてあつた。彼れは、日日或る會社に出てゐて、カナリ煩雜な務めを執つてゐた。眼は疲れ、手は勞れて、夕方歸つてくると、もう何をするのも厭だ、活動寫眞や、劇場などに行くこともあつたが、それから受ける慰めは寔に一時的な儂ないものであつた。彼れは會社の歸りに、青いボブラの並木路のはてに、火のやうな夕日の落ちるのを見て、歸つて來て、二階の手すりに凭つて空を見ると、十

日ばかりの月が、丁度彼れの頭のうへに、水のやうな光りをただへてゐた。彼れは何だか身に沁沁と感^{かん}じるものがあつた。ふいと頭^{あたま}に閃^{ひび}めいて來た感^{かん}じは、歌といふことであつた。斯う云ふ時、自分の思^{おも}つてゐることが、氣持^{きもち}ちよく歌へたら、歌は面白^{おもしろ}いものに違^{ちが}ひない、併^{しか}しそれは容易^{ようい}なことぢやあるまい。折角面白^{おもしろ}からうと思^{おも}つて、やり出して、さもさアやり出して見ると、それがね、つから面白^{おもしろ}いものでなかつたら、徒らに失望^{しつぱう}を招^{まね}くに過ぎなからう。やらうか、やるまいか。それを考^{かんが}へるよりは、外^{ほか}に先決問題^{せんけつもんだい}がある。それは、『歌は面白^{おもしろ}いものか、どうか』と云ふことである。之れは是非其の道の先輩^{せんぱい}に質^たして見る必要がある。面白^{おもしろ}いものと言^いはれたら、やつてみる張^はり合^あひがあるが、面白^{おもしろ}いには面白^{おもしろ}いが、面白^{おもしろ}くなる迄^{まで}には、遠^{とほ}い未來^{みらい}があると言^いは

れたら、先づ考へものである。當つて碎けるだ、一つ訊いてみよう。

——こんな動機が、私にああ云ふ問を發しさせたのではあるまいか
所が、私が事もなげに、『面白い、初期の間は殊に面白い』と言つたの
で、『それぢや、やつて見よう』と云ふ氣になつたのだらう。

『初期の間は殊に面白い』と瞭り言つた以上私は何處までも、其の
言葉を意義のあるものにしてやらなければならぬ。興味に誘はれ
てやり出したのだから、興味を以て導かねばならぬ。私は彼に先づ
身邊の事を詠んでみるようにと言つた。すると彼は會社員として
自分の見た事や感じた事を詠んでもいいかと云ふことを問うた。
そして、自分の興味を惹いたものであつたら、それが歌の材料であら
うか何うかと云ふことを考へないで、直ぐ歌にしても可いかと附け

足した。私はそれで宜しいと答へてやつた。

二三日してから彼れは會社の歸りだと言つて寄つた。其の時見せた詠草の中に、こんなのがあつた。

ひづかしき社長の顔も見ずにすみぬ今日のひと日の安かり
しこと

日常の實生活がすらすらと氣持ちよく表はされてゐる。『こんな風に出來れば文句は無い』と言つてやつたら、彼は怡怡として歸つて行つた。それから一週間程経つて彼は前回に比べて倍程も數のあつた詠草を持つてやつて來た。今度は會社員としての彼を歌つたものよりは家に歸つてからの彼を詠んだものが多かつた。彼の顔には佳い作がある、見てくれと云ふやうな笑みが、ありあり浮んでゐた。

私は先づ其の詠草の一ページを誦んでみた。

かへりくれど家には妻も子もあらず戸を明けて入る淋しき
われかな

電燈はさすがに點り居れるかな冷たき室に坐つてみたり

こんなのが眼に入つた。幼ない詠みぶりであるが眞率愛すべきものがある。初めの『戸を明けて入る』は淋しい作者が見える、何でも偽らずに、天真を流露させなければならぬと言つたら非常に満足さうにしてゐた。斯うして導いて行つたら、彼は段段興味が出て來て、毎日五首から十首も詠むやうになつた。彼は沁沁歌は面白いものと云ふことを感じて來た。

初めから字句の末に走つて技巧の事ばかり矢筈しく言はれると

初心しんしんの人の思想しきさうは萎縮みしゆくして、發達はつたちすべきものも、小さく固かたまつて了しまふ。
自己じこの思想しきさうを自由じゆうに發達はつたちさせるには、表白へうはくを拘束こうそくさせないようになければならぬ。然さうして何處どこまでも自己じこを中心ちゆうしんにして、自己じこの氣息きを其その作さくにかけなければならぬ。歌うたは自己じこと離はなれぬもの、自己じこの喜怒哀樂きあいにらくの情じやうは悉ことごとく歌うたにうつるもの、自己じこの血ちを分わけた子こでも、斯かう自己じこの思おもふ通とおりに行いくものぢやないと自覺じかくしたら、歌うたほど世よの中なかに自己じこに親したしいものはあるまい、切實せつじつな味あじはひを持つたものはあるまい。
『歌うたは面白おもしろいものか』
斯かう私わたしに問とうた人も、今は切實せつじつな人生味じんせいみを歌うたに表あらわはして居ゐる。歌うたには沈痛ちんつうな面白味おもしろみがあると言いつて居ゐる。

二 目の前の事實

初期の歌の作者の多くは、自分の最も眼近な事柄を材に取らうとせず、殊更遠い、自分の世界と掛け離れた事を詠まうとするから、それに使役されるかたちになつてくる。自分に最も近い目の前の事實を取つて、詠んでゆくやうにしたら、それが容易くして且つ興味の
ある事でなければならぬ。諸君の多くは私の謂ふ未だ初期の歌の作者と認める。然うして、矢張自分の眼近かな事柄を閑却して、自分より外の世界の事を追はう追はうとする傾きがある。何故目の前の事實を寫さうとしないのであらうか。之れは、是非其の起因をたづねて、其の誤りを正さねばなるまい。

自分の眼の前の事柄と云ふと、それが一概につまらないもののやうに思つてやしまいか。こんな事を言つたら、人が笑やしまいか。餘り自分を下らないものに見やしまいか、と云ふやうな要らぬ謙遜をして、その目の前の事柄を斥けてしまふことがあらう。さうして他人の作つたものが傑れてゐると云ふ評でもついてゐると、然ういふ歌でなければ作りばえがせぬと思つて、盛んにその模倣をやる。甚だしきは字句の末までも、其の作に似させるやうに努める。まことに下らぬ努力である。頭を冷して、よく考へて御覽なさい。模倣と云ふことは初期の作者には免れないことで、或る場合には、それが一つの進歩すべき手段となることもある。併し、それは然う自覺してやるべきもので、模倣が全部では困る。自覺のない模倣は、作者の